

# 知能テストに来る 幼児の実態



## 望月武子

「知能テストの練習の本を出しているそうですが、いたたきたい」「模擬テストをして下さる」  
「来年入学する子どもの準備教育をしているそうですが……」

この頃は入園、入学に際し予め知能テストを受けることが、お母さん達の常識になっていますが、近頃私達の相談室には不愉快な問い合わせが多くなっています。

「子どもにどこぞの学校を受けさせたいので入学試験の練習のためにテストを受けさせていただきたい」「子どもが引っ込み思案で初めての所ではわかっていることでも答えられない。こんな調子では入学試験の時に困るので場面慣れさせたい」

これらは罪の軽い方で、

「何回か通って勉強している人があるなどと、全く事実無根のことを言って攻めたてられる。相談室は子どもの知能、性質や日常生活で心配なこと困ったことなど問題がある場合、その解決や指導の相談相手になる所で、そのためには子どもを理解する手段として知能テスト、性格テストなどをしていること、したがって入試の練習や場面慣れのための場所ではないこと、特に問題がない場合半年位の期間をおかなければ知能テストの申込みをお断わりすること、短期間に何回もテストを受けても意味のないこと、ましい入試の準備教育などはやっていないし、やること自体に反対し

ていることなどを話し、理解していただくのに苦労してしまいます。ここでどう誤解してのことか相談室に入試の練習場所と心得がいをしている方が相当あるようなには苦々しく感じます。

それにしてもエスカレーター式の私立学校や、国立小学校に入れたいという傾向は年々強くなっているようです。今、多少の無理をしても入ってさえしまえば、将来受験の心配がないという魅力、特別の学校に入れたという優越感も手伝つてか、一応受けさせてみようという人がかなり多くなっています。例年、九月十日頃になると、そういう特別な幼稚園・小学校の受験を目的に知能テストを受けに来る人がふえてきます。もちろん多くは「就学するので子どもの発達状態を調べておきたい」、「相談の結果子どもに適した学校を決めたい」、「能力がなければ子どもに無理をさせたくないの」という人達で、そういう意味でならたいへん結構なことだと思いますが、中には親がこれと思いこんだ学校に入れるためどうしても知能指数をあげたい、いくつ以上ないと困るという人（知能指数ということばは知っていても意味を理解している人は少ない）、家でいろいろ知能テストの問題を練習させた上でつれて来る人、あらゆる相談所を廻り歩いて、どこそこでは知能指數がいくつだった、あそこは点が甘いとか辛いとかいう人があるのですから困ったものです。また何回もテストを受ければ I.Q. が

高くなる、あの学校に入るには I.Q. 一五〇以上ないとダメだとか、家庭教師をつけて勉強させなければ今格できないというような、どこからどう耳に入れた情報なのか、だんだん尾ひれがついてしまったものか、ちょっと常識では考えられないようなことを本気で言つて来る人もあります。確かに一部では、幼稚園・小学校の受験のため準備教育が行なわれ、親たちの中には幼ない子どもに家庭教師をつけたり、塾に通わせてテストの練習をさせたり、また一部の幼稚園では補習と称して週に二、三回、或いは毎日何時間か残して受験勉強をする所があります。そういう一部の人達は異常な零細工にまきこまれ、多くの母親が必要のない不安・焦燥に陥つてだんだん子どもに受験勉強を強いる傾向があるようです。

子どもを良い学校に入れたいと思う気持は親として当然なことでしあうが、そのために幼ない子どもに受験勉強を強いるのは、目的のための手段とはいえ不健全な現象だと思います。四、五才の子どもでもかなり記憶力は発達していますから、うまく教えればある程度のことは覚えます、しかしこの時期の子どもに重要なのは、頭の上で、口先きたてで、教えられた結果ではなく、子ども自身が実生活の中で体験し、つかみとつていくという過程です。時間もかかり、今すぐの成果も少なく、失敗も多いけれど、

そういうことの積み重ねが意味のあることを忘れてはいるようですが。生れたばかりの赤ちゃんの手をひっぱって歩く練習をさせる親があるのでしょうかと質問したら、そんな馬鹿なことを、そんな無理なことをする親があるはずがないと誰でもが考え、誰でもが言うでしょう。何故？ 赤ちゃんの発達がその段階に至っているから、これも誰でもが答える明白な理由です。しかし生れたばかりの赤ちゃんに歩かせるのと同様のこと——幼ない子どもに入試のためつめこみ教育をすることはあたり前のように行なわれているのです。来年から幼稚園に入れようというので、名前ぐらいかけなくてはと、三才の子どもに文字を教えたり、ある学校を受けるのに五十までのたしひきが自由にできなくてはと、数の勉強をさせる、よその子どもが何ができるから家の子どももと、何でもよその子に劣っているところがあるとたいへんという調子で、子どもの発達も興味も無視してしゃにむに教え——もうとする。教えこみさえすれば子どもの知能を伸ばすことができる」と信じ、教えこむことが最良の方法と思いこんでいる（これは相談室に来る母親の一般的な傾向ですが）。子どもの欠点をみつけては矯正しようとすると、弱い所を探して補つてやろうとする。このように知的な面の教育にはたいへん精力を費すのに、日常の生活習慣の自立はなおざりにされている。幼稚園に入れたいと、数や色の名を教

えるが、便所にひとりでいなければならないのはあたりまえのよう思っている、折り紙・絵のけいこはさせるが、食事の時にこぼすからと親が口に運んでやる、洋服はきせてやる、有名幼稚園に入れたためひとりで通園ができないで、常に親が送り迎えしていることの子どもへの悪影響には思い及ばない、ピアノや絵のけいこに時間をとられ、子どもが自由に遊ぶ暇がない、こういうようなことががらが至極あたりまえの事になつてはいるのです。こんな調子で育てられるので、子どもは温室で促成された植物のようで、依存的、自分の足で立っているたくましさがない、いろいろの知識は豊富だが、自分で考えよう、最後まで努力しようとする気持がない、将来困難にあつた時どうなるだろうかと心配を抱かせる弱い面があります。

最近相談に来た人の中にこんな例がありました。Aちゃんは四人兄弟の末子でひとり息子、消極的で幼稚園でも自分から発表することがない、母親は是非慶應に入れたいといふ。テスト場面ではたいへん緊張が強く、自信のない様子でなかなか応答しない。苦労の末、やっと引き出した結果はIQ一三二で相当高いが、内容はたいへんムラがあり三才から十一才までにわたつてはいる。動作が遅い。社会的生活能力検査の結果はS.Q.六〇というアンバランスな発達だった。今まで近所の子どもと遊ぶと悪いことを覚え

るからと家の中ばかりで遊ばせ、末子のかわいさ一方で手をかけすぎた結果によるもので、友達遊びを充分させること、子どもでできることはなるべくひとりでさせるよう心がけることなど、気をつけた結果たいへん活潑になってきた、と報告がありました。

Mちゃんは五才九ヶ月の女子、父親が早期教育を主張し、小さいうちに教えておけばそれが基礎になって将来のためになるというので三才から文字、数を教えた。兄の場合はたいへん効果があり現在学校で優秀な成績をおさめているので、本人にも同じように教えたが、興味がないばかりか勉強を嫌うようになった。

兄の時はこうだった、お前は頭がおかしいと叱られすっかり劣等感を持つてしまった。今年になって受験のための補習が幼稚園で始まつた。初めのうちは楽しんで行っていたが一週間位たつと幼稚園がいやだといいだした。幼稚園は好きだがお勉強はいやだという。しかしある遊戯や友達遊びの楽しさにひかれて行つている。この子の場合はIQは一八、態度は極めて自信なく、積極的に発言しない。テスターが励ましてやると自信を得て答える。だが少し難かしい事になると考え方としないで、その間から逃れたいという様子で「分らない」をくり返す。常識、記憶などはよいが数の観念は低く一・二・三でなら十五まで数えるが、不安

そうでテスターの顔色を伺つて、一つ二つになると全く自信

がない様子で行きづまつてしまふ。母親も余り早くから教えこまなければこんな混乱はなかつたでしょう、と反省していました。多くの母親がこの頃の子どもはかわいそうだといながら、そのかわいそうなことをさせている。これにはいろいろ原因があると思いますが、大切な幼児期の指導を忘れて、子どもを受験勉強に追いかけてる風調は一日も早くなくなつてほしいと思います。

最後に、三十六年十月中に相談室を訪れた人の相談事項を調べてみたので報告します。総数三三〇人中小学校受験のため一六人、幼稚園受験のため三六人、知能程度を知りたい、社会性がないなど訴えているが受験に関連しているものを含めると約一九〇人で六〇%が入試を目的にテストを受けています。残りは知能が遅れている一九人、ことばが遅い八人、吃音七人、おちつきがない七人、幼稚園・学校へいかない六人、成績不良、神経質、その他、数多くの問題を訴えています。

年令的にみると一才から三才迄にわたり、五才が最も多く九〇人、六才八五人、以後四才、三才、二才、七才、一才の順になつています。

(愛育研究所教養相談係)